

Composition Division  
作文部門  
受賞者  
Award winner

静岡県知事賞

## マーフィーと僕

二年 朝倉昂彦

僕は今、人生で初めて犬を飼っている。そのかわいさと言ったらハンパない。白い体に真っ黒なくくりとしたまるい目。耳は長くしっぽも長い。そんな生き物が学校から帰ってくる僕めがけて思いっきりしっぽを、いやおしりまでフリフリしながらとびついてくるのだ。外出していて、いくら楽しくても帰れば犬がいると思うと、早く帰りたくてしかたがなくなった。こんなに僕を夢中にさせる、その犬の名は「マーフィー」だ。

マーフィーは生後二ヶ月で我が家にやってきた。来た当初は腕の中におさまるくらいの少し大きめのぬいぐるみのようなだったのに、今では手足も長くスラッとし、体重も10kgも増えたのだ。でもまだ四ヶ月の赤ちゃん。人肌恋しいのか僕の足の上や寝ころんだ僕の体に首をのっけて寝るなどとても甘えんぼうだ。

しかしそんな幸せなマーフィーとの日々は何年と長くは続かないのだ。なぜなら、マーフィーは将来盲導犬になるかもしれない犬だからだ。我が家はパピーウォーカーなのだ。

きっかけは小学生の頃、僕が盲導犬について調べ、それを見た母が興味を持ったことに始まる。毎日けんかをくり返すばかりの僕達子どもにやさしい気持ち、他を思いやる心を取り戻させようと母が決断したのだ。

数回のレクチャーを受けた後、コロナの影響もあり約2年待ちようやくパピーウォーカーとなった。マーフィーを人間が大好きな犬にすることが僕らの最大の任務。遊んで、なでて、一緒にポーっとして。大バカかもしれないが、性格はおだやかで、顔も良く頭も良いパーフェクトマーフィーなのである。

このようなパピーウォーカーの日々は約10ヶ月と決まっている。我が家での生活が終われば本格的な訓練が始まり見事盲導犬になれたら、約10年後、任務を全うした後、僕の家に戻ってきてくれるかもしれない。

もし盲導犬になれなければ違う仕事をする犬になったり、一般の家庭に引き取られたり、二度と僕達家族と会うことはない。常にそのことは頭にあり、考えると泣けてきてしまうが、マーフィーは僕の家に来てくれた。そんなことはつゆ知らずかわいさをふりまいてくれるマーフィー。今、一日一日のマーフィーとの時間を大切にしたい。

マーフィーも人の役に立つためにこれから様々な訓練にチャレンジすることになるだろうし、僕も受験に向けて勉強を頑張ろうと思う。